ある自閉症者の夢分析

—Donna Williams の見た子猫の夢の検討—

名 島 潤 慈

Dream Analysis of a Woman with Autism: An examination of cat dreams dreamed by Donna Williams

Junji NAJIMA

(Received September 25, 2009)

キー・ワード：高機能自閉症、夢分析、子猫

I はじめに

自閉症は３歳頃までに現れ、①他人との社会的関係の形成の困難さ、②言葉の発達の遅れ、③興味・関心の狭さや特定のものへのこだわりといった特徴がある。知的面での障害（IQ が70以下）やてんかんを伴っていることも少なくない。自閉症のなかで知的障害を伴わないものは高機能自閉症と呼ばれる。なお、知的発達の遅れも言葉の発達の遅れもないものをアスペルガー症候群（ICD–10より）ないしアスペルガー障害（DSM–Ⅳより）と呼ぶが、臨床的には高機能自閉症とアスペルガー症候群との鑑別はむずかしいことが少なくない。高機能自閉症やアスペルガー症候群は、小児崩壊性障害やレット症候群と共に広汎性発達障害に分類される（高機能広汎性発達障害という場合には、①高機能自閉症、②アスペルガー症候群、③特定不能のその他の広汎性発達障害のなかで高機能のものという３つが含まれる）。ただし、広汎性という言い方に少し問題があるため、近年では広汎性発達障害の代わりに Wing（1996）の「自閉症スペクトラム」(autistic spectrum) という言い方がよく用いられている。

ところで筆者は臨床心理士という職業柄、高機能自閉症の子どもや青年たちと話しをすることがあるが、彼らとの話し合いのなかで、夢が語られることも少なくない。筆者の印象では、彼らが報告する夢は恐怖夢・不安夢が多い。兄弟との闘争夢（弟に撃たれたなど）もある。本稿では Donna Williams (1963–)（以下Ｄと略）という１人の高機能自閉症の女性を取り上げ、彼女の見た猫の夢を通して、自閉症者の内的世界を探ってみたい。具体的には、Ｄが28歳のときに出版した自伝 *Nobody Nowhere*（Williams, 1992）に基づいて、Ｄの生活史と夢を絡ませながら検討する。Ｄが見た10個の夢は表１にまとめた。子猫が登場する夢はＤ3、Ｄ6、Ｄ8である。夢分析の方法は、可能な限り夢主の内的枠組みに沿って夢という隠喩的表現の意味を見出していく「能動的夢分析」である（名島 , 1999, 2003, 2009を参照）。

Ｄは1963年にオーストラリアにて出生。父親、母親、１歳上の兄、６歳下の弟あり。Ｄは幼少期より不器用かつ内閉的、感覚がひどく過敏で、周囲との関係がよくなかった。特にＤの母親とは最悪で、例えばＤは２歳のころには母親から毎日顔に思い切り枕を押しつけられたり、

表１　Ｄの見た10個の夢

番号	年齢	夢タイトル	夢の内容（要約）	感情	夢についてのＤ自身の連想
D1	３歳未満	どこまでも続く白い世界の中を歩いてゆく夢	一面真っ白の世界。私のまわりにだけは明るいパステルカラーの丸がそこら中にいくつも浮かんで、色とりどりにきらめき、そのなかを通ってゆく。きらめきも私のなかを通ってゆく。	うれしさ	生まれて初めて見た夢。うれしくて、声を上げて笑いたくなるような夢。（Ｄは３歳まで自由に「私の世界」を楽しむ。）
D2	５歳ころ	巨大な津波に呑み込まれる夢	丘の向こうから巨大な津波が押し寄せてきて私を呑み込む。私は棒に必死でつかまり、ぎゅっと目をつぶる。自分を連れ去ろうとする波の圧倒的な力のなかで、自分がばらばらになりそうなのをなんとかこらえる。潮が引く。津波は猛烈な勢いで丘のほうへ吸い込まれてゆく。恐怖で動けないまま私は棒にしがみついている。	恐怖	この夢は、本当の私がそれまで他人の感情というものをどのようにとらえているかを象徴している。（Ｄの父方祖父がなくなる少し前から繰り返し見た夢である。）
D3	11歳	子猫が大きなネズミに姿を変えて、手に噛みつく夢	目の前に現れた美しい、青い目をした子猫の頭をかがんでなでてやろうとしたら、子猫は大きなネズミに姿を変えて、私の手に思い切り噛みつく。血が飛び散り、悲鳴を上げて目を覚ます。	記載なし（恐怖？）	記載なし。
D4	21歳	私の誕生日に３人で乾杯する夢。	親友の女性と、見知らぬ黒い髪の若い男と、私の３人で、アンティークレースのテーブルクロスのかかったテーブルのまわりに立って、クリスタルグラスを掲げて乾杯する。２人は、「お誕生日、おめでとう」と言う。	記載なし	この夢は２年後に現実のものとなった。つまり、２年後の誕生日にティムとカレンと私は乾杯した。
D5	26歳	海の夢	* 夢の詳細は不明。Ｄはこのころ、悪夢のように繰り返される海の夢に悩まされていた。	記載なし（恐怖？）	この夢はおそらく、自分の葛藤を象徴的に表している海の本物の姿に面と向き合うようにと私を駆り立てている。
D6	26歳	弟が７匹の小さな子猫を縛り上げている夢	弟が７匹の小さな子猫を縛り上げている。私はやめさせようとして弟に近づく。そのとたん、弟は笑いながら、高い塀の向こうへ１匹を放り投げる。同時に私は母親に、後ろから髪の毛を引っ張られる。私は必死になって子猫たちを救おうとしたが、自分も髪を引っ張られ、壁に頭を打ちつけられてどうすることもできなかった。	記載なし	自分がキャロルになっているとき、本当の自分をいつも子猫の姿として思い描いていた。私が出会ったキャロルは、私を迷い猫のように家に連れていってくれた。また私は、７匹の子猫の入った袋が捨てられていたのを見つけて家に持ち帰り、ガレージに隠して飼った。後には私自身が、そのときの子猫たちのように、いろいろな人のガレージで眠ることになった。私の心の中で

					は、7匹の子猫は1匹1匹が虹の色の1色であるように思えた。さらにその虹の色は、ひと色ずつが人間の抱く種々の感情を表しているように思えた。弟への感情は、私が自分とは別の人間だと認識した人に抱いた、生まれて初めての感情だった。その弟が夢の中では子猫たちを縛って壁の向こうに放り投げていた。縛られた子猫たちは私自身の象徴だった。心にくっきりとものを感じてしまうようになったことが恐ろしくてたまらず、金縛りになっていた私自身の姿だった。その無力な本当の自分を私はこれまでキャロルに仕立てあげては壁の向こう側へ、世の中へと放り投げてきた。
D7	26歳	祖父が行ってしまう夢	私は高い壁に囲まれている。壁に開いた穴から祖父は行ってしまう。私は祖父を追いかける。壁の穴を抜けると不毛の土地に立っている。私は大声で祖父を呼ぶ。声はうつろに響き、誰も現れない。私は元の壁に向かって走り、再び最初の場所へと穴を抜ける。母が待ちかまえていて私はつかまる。壁のこちら側に閉じこめておこうとする母に私は全力で抵抗して向こう側の土地へ戻る道を捜すが見つからず、私は完全に閉じこめられてしまう。そこで飛び起きる。	記載なし	記載なし。(Dの父方祖父はDが5歳のとき、藪の中の小屋に祖母を残して死去していた。)
D8	26歳	7匹の子猫に餌をやって後悔する夢	屋根裏部屋のむきだしの木の床をネズミが1匹走ってくる。続いてもう1匹。男の人が出てきてネズミを殺そうとする。私は「殺しちゃだめ。それ、本当はネズミじゃないの」と言い、だいぶたってから再び言う。「本当は猫なのよ。ね、餌をやってもいいでしょう」。男が棚の戸を開けると中から缶詰が転がり出る。私は缶を開け、子猫たちを呼ぶ。こちらのほうへやってくる子猫を、男は撫でようとする。「だめ」と私は叫ぶ。「さわったら死んじゃう」餌を食べると子猫たちはみるみる大きくなる。私は餌をやったことに後悔の念を抱く。この後私がいなくなって他に	後悔	記載なし。

			誰も餌をやる者がいなかったら、猫たちはどうなってしまうのか。一度餌をやってまた放り出してしまうぐらいなら、最初から何もやらないほうがよかったのではないか。床にしゃがみこんだ私を男がのぞき込む。私は囁く。「子猫はもっといるの。全部で7匹」そこで私は汗だくになって飛び起きる。		
D9	26歳	10代のキャロルが女の子を守ってくれる夢	私は10代のキャロルになり、道の角で友人たちとおしゃべり。近くのゴミ箱から、ぼろぼろの服を着た汚い4歳くらいの女の子が出てくる。キャロルは友人たちに背を向けると彼らとその女の子との間の壁になり、女の子を見つめ、「帰ってきたのね」と言う。女の子は道の角まで後ずさりする。「大丈夫。絶対にあの人たちはこっちに来させない」キャロルはそう言うと友人たちから離れ、女の子の前に立って歩き出し、女の子へ後ろ向きに手を出したが、ついてくるかどうか確かめるよう振り返ることはしなかった。女の子は走ってきて、キャロルの顔は見ずに手だけつなぐ。2人はそうして歩いてゆく。女の子はおびえたような目で何度も肩越しに振り返る。	おびえ	私の心のなかで、ついにドナは子猫から人間の姿に変わった。ウイリーは既に、やさしく私を励ましてくれるお母さんになっていた。さらにキャロルが、人の群からドナを守ってくれると約束してくれた。最後の戦いは、ウイリーがキャロルを受け容れなくてはならないこと。
D10	26歳	10代のキャロルがウイリーの後ろを歩いてゆく夢	広い倉庫の床をウイリーが歩いてくる。その先には10代のキャロルがいて、隣の男を指して「私のお客よ」と言う。その口調は、キャロルが娼婦のようにしてその男と暮らさなければならないことを示していた。「そんなふうにして暮らす必要はない」とウイリー。キャロルは反駁する。「おいで、ぼくと一緒に暮らそう」とウイリー。見知らぬ男は傲慢な態度でこちらを眺めている。「どうやってお金を払えばいいの。私、お金を持っていない」とキャロル。「皿洗いをすればいい」とウイリー。「私、自分のことぐらい自分で何とかできるわ」少しうれしそうにキャロルが言う。「もちろんできるさ」とウイリーが応えて歩き去る。キャロルはウイリーの後を歩いてゆく。	うれしさ	記載なし。

煙草の火で皮膚を焼かれたり、ベルトの金具で繰り返し打たれたりした。母親は幼少期のDのことを「宇宙人」「ウジ虫」「馬鹿」「私の人形」（私の人形なのだから殴ろうと壊そうと私の自由）などと呼んでいた。ちなみにDは大学の教職課程を卒業した後自立して、1995年（32歳）から自閉症分野のコンサルタント業務を行っている。同時に、作曲や作詞も行っている。

Ⅱ　Dの見た子猫の夢の吟味

1. 子猫の夢

結論から先に述べておくと、D6やD9についてのD自身の連想において述べられているように、夢のなかの子猫はD自身である。その子猫が登場する最初のD3（11歳）では、Dが目の前に現れた子猫の頭をかがんでなでてやろうとすると、子猫は大きなネズミに姿を変えて、Dの手に思い切り噛みつく。血が飛び散り、Dは悲鳴を上げて目を覚ます。子猫は慰撫される対象であると同時に、不用意に接近すると接近した者を傷つける危険な存在でもあった。

子猫が登場する２番目のD6（26歳）では、Dの弟が７匹の小さな子猫たちを縛り上げている。Dがやめさせようとして弟に近づくと、弟は笑いながら高い塀の向こうへ１匹を放り投げる。同時にDは母親に、後ろから髪の毛を引っ張られる。Dは必死になって子猫たちを救おうとしたが、自分も髪を引っ張られ、壁に頭を打ちつけられる。弟や母親に代表される他者は、子猫たちが自由気ままにくつろぐことを許さない。子猫たちは自由を拘束され、共同世界へと無理矢理排除されていく。

子猫が登場する最後のD8（26歳）では、男がネズミを殺そうとするが、Dは、本当は猫だと言ってそれを止める。男が棚の戸を開けると中から缶詰が転がり出る。Dが缶詰を開けて中の餌を与えると子猫たちはみるみる大きくなり、Dは餌をやったことを後悔する。この後Dがいなくなって他に誰も餌をやる者がいなかったら、猫たちはどうなってしまうのか。一度餌をやってまた放り出してしまうぐらいなら、最初から何もやらないほうがよかったのではないかと。Dは男に、子猫は全部で７匹いるのだと呟く。そして、次のD9（26歳）では、猫はもはや登場しない。D9は、10代のキャロル（D自身）が友人たちから４歳くらいの女の子を守るという筋立てである。D9についてのD自身の連想からすれば、守られた４歳くらいの女の子もD自身である。実際、連想には、「私の心のなかで、ついにドナは子猫から人間の姿に変わった。ウイリーは既に、やさしく私を励ましてくれるお母さんになっていた。さらにキャロルが、人の群からドナを守ってくれると約束してくれた。最後の戦いは、ウイリーがキャロルを受け容れなくてはならないこと」と記されている。

2. ウイリーとキャロル

Dの自伝によれば、２歳前後、Dが母親からひどく虐待されていた頃ウィスプスとウイリーという特別な友だちが出現する。ウィスプスは髪の毛の束に似た姿の架空の生き物で、Dに暖かい安心感を与えてくれるもの（これはもともと、Dの髪の毛を優しくとかしてくれていたリンダ叔母さんが契機となっている）。一方、ウイリーはぎょろりとした２個の目玉のお化け。緑色の瞳。ウイリーの性格や行動はDを圧迫し踏みつける母親をなぞっている。ウイリーは憎々しげな目であたりをにらみつけたり、気に入らないことがあれば唾を吐いたり、言葉のオーム返しや沈黙を有効な武器として使う「憎しみの仮面」であった。ウイリーは表面上の感情を身につけていたが、ウイリー自身が本当に持っていた感情は怒りであった。

キャロルは３歳すぎに登場する。Dはある日公園でキャロルという活気に満ちた女の子に会い、キャロルの家に行く。そして、彼女の母親から優しくもてなされる。Dは次の日から公園

でキャロルを待つが、彼女は二度とやってこなかった。Dは、子猫を拾っては家に連れ帰るようになる。キャロルに会った日の自分を子猫に見立てて、D自身がキャロルの役を演じていたという（D6の連想にもキャロルは私を迷い猫のように家に連れていってくれたとある）。ともあれ、キャロルはやって来ず、そのうちDは諦める。しかしある日、鏡に映ったDの瞳をみるとキャロルだと分かる。Dが鏡の前を去るとキャロルもいなくなり、Dが鏡の前に行くとキャロルも戻る。そして5歳。Dは何とか鏡のなかに入ろうと努力するが、なかに入れないいらだちともどかしさにDは、自分の頬を叩いたり、体中を噛みついたり、髪を引き抜いたりする。最後にDは、キャロルがDのなかにいることを知る。キャロルはいつもにこにこして社交的。よく笑って踊る「皆に好かれる女の子」。（現実のキャロルは、ウイリーが現れた1年半後に現れた。Dが3歳のころ、現実のキャロルは10歳くらいだったという。）

生活史的に見ると、5歳のときにはDを可愛がってくれたDの父方祖父が死去している。明確に記されてはいないが、キャロルとの一体化はおそらく、Dの父方祖父という庇護者の喪失が契機となっていよう。

3. Dのとった安全保障感獲得作戦

Sullivan（1947）の言うsecurityは安心感とか安全保障感などと訳されているが、人が対人世界のなかで生きていくうえでなくてはならないものである。この安全保障感が脅かされると、人はさまざまなやり方で安全保障感を回復させようとする。Dの心が作り出したウィスプスとウイリーのうち、前者はそういった機能を有している。しかし、内的な迫害的母親像とも言えるウイリーは、強さと論理でもって外界からDを保護すると同時に、Dの対人世界をひどく脅かすものであった。自己慰撫的なウィスプスはウイリーに対しては無力であった。

実在のキャロルを契機として作り出された社交的なキャロルは、Dのいわば理想的な第2人格であった。Dは現実がつらいとき、キャロルを装って現実を乗り越えていこうとする。ただしそれは、現実に直面化するのではなくて、現実から逃走するという形であった。Dにとってウイリーは迫害者であり、かつ迫害者の持つ怒りそのものであった。その怒りを原動力としてDは唾を吐いたり、言葉のオーム返しや沈黙を有効な武器として使用したりするので、Dはますますを取り囲む対人世界に反感と困惑をもたらしていく。そこから逃走するのがキャロルの役割であった。実際Dは後に、「私のなかのウイリーとキャロルは、それぞれ闘争と逃走を導く、私のサバイバルのためのメカニズムであったと言えるかもしれない」と述べている。もっとも、この「逃走」は、客観的に見れば「社会適応」ということになるのであるが。

Dとキャロルとの関係は興味深い。例えばDは3歳から小学校入学前まで、母親によって私立の養護学校に通わされるが、そこでは、「キャロルは皆と話しをする。だから私も人に話しかけるようになった」という。

もともとキャロルははずむような明るさ、活気さ、優しさの象徴であった。現実のキャロルがそうであったし、キャロルの母親も優しかった。だからこそDは、キャロルを心のなかへ取り入れたのであった。そして、取り入れられたキャロルはその明るさと優しさによって、破壊的なウイリーを徐々に変えていく。

4. 自己の回復

D10（26歳）の最後では、10代のキャロルはウイリーの後を歩いてゆく。ウイリーはキャロルに対して一緒に暮らすことを強く勧め、キャロルはためらいつつも最後はウイリーについてゆく。ウイリーはキャロルを受け容れ、キャロルもウイリーを受け容れたのである。

もともとDは26歳の誕生日の直前、ティムやメアリーに別れを告げ、オーストラリアからイ

ギリスに移住する。そして、代理の喜劇役者として舞台に立つ。この頃繰り返しD5の「海の夢」を見る。その後26歳のときベルギー・オランダ・ドイツを旅し、ヘッセンでドイツ人の青年ジュリアンに出会う。この頃、D6とD7を見る。その後Dはロンドンで、ある大病院の管理部門の秘書となる。アパートではタイプライターで自分の心のうちを綴る。頻繁に図書館に通って、自閉症についての本を読む。そして、大病院に勤務しているある児童精神科医にDが書いた原稿（自伝）を見てもらって、出版することを強く勧められる。その後、D8の「７匹の子猫に餌をやって後悔する夢」を見る。そしてこの後、キャットフードの缶詰を買ってきてベッド脇のサイドテーブルの上に置き（これは、自分自身の象徴である子猫たちの世話をするのだということを自分に約束した印だという）、ベッドサイドのランプの光に包まれたキャットフードの缶詰を見つめていて、寝入ってD9の「10代のキャロルが女の子を守ってくれる夢」を見る。D9ではもはや子猫ではなく、４歳くらいの女の子が登場する。

子猫という隠喩は多義的かつ過渡的である。捨てられた存在から世話される存在へ、居場所のなさから定住へ、気ままから束縛へ、動物の子から人間の子へという推移を含み持っている。このような推移はしかし、社会のなかにおけるD自身の自己成長と並行していよう。

ところでDはある日がらくた市で、古ぼけた小さなぬいぐるみと出会う。それは、羊のようにも、ウサギか犬のようにも見えた。Dは20ペンスでそれを買って「旅男」と名付けた。この旅男がいると、眠ることへの恐怖は薄らいでいった。しかし、旅男は夢からDを守ってくれることまではできなかった。Dを守ったのはウイリーであった。D10においてウイリーは、娼婦のような暮らしをしようとするD（ここではキャロル）を押しとどめ、ウイリーと一緒に生活することを強く勧めている。結局D10には、ウイリーの側からの強い誘いがあったとは言え、最終的にはウイリーについてゆくことを選択したDの自己決定がうかがえる。

Ⅲ　おわりに

近年、自閉症者自身が書いた自伝が数多く出版され、彼らの内的世界が次第に明らかになってきている。しかし、自閉症者の夢分析はこれまで本格的になされていない。夢という隠喩的表現がすぐれた投映法であることを考慮すれば、彼らの夢を分析することによって彼らの心理的世界をより深く探索することができよう。筆者は本稿で１人の自閉症者の夢を取り上げて吟味した。子猫は文字通り動物の子である。自己の感覚と感性のままに生きようとする動物はしかし、共同社会の側の感情と論理によって束縛される。Dは自伝のなかで、「精神錯乱を防ごうとするメカニズムが非常に敏感に働いている場合が自閉症である」と述べている。Dはまさに自分のなかの子猫を殺さずに、それどころか子猫を保護するためのさまざまな心的操作を用いて社会的人間へと成長していった。そのプロセスは驚嘆すべきものではあるが、しかし、それと類似したものは自閉症のみでなく健常児の発達にも見られるよう。実際、われわれが自閉症児・者とコミュニケーションを取ることができるのも、彼らとの共通部分があるからに他ならない。

文献

名島潤慈（1999）夢分析における臨床的介入技法に関する研究　風間書房
名島潤慈（2003）臨床場面における夢の利用―能動的夢分析　誠信書房
名島潤慈（2009）夢と浄土教―善導・智光・空也・源信・法然・親鸞・一遍の夢分析　風間書房

Sullivan, H. S. (1947) *Conceptions of modern psychiatry*. New York : W.W.Norton & Company Inc. (中井久夫・山口隆訳, 1976, 現代精神医学の概念, みすず書房)

Williams, D. (1992) *Nobody Nowhere : The remarkable autobiography of an autistic girl.* New York : Harper Collins Publishers. (河野万里子訳, 1993, 自閉症だったわたしへ, 新潮社)